頸部に発生した脂肪腫の1例と臨床統計的観察

鈴木三郎・塩入重彰・木野孔司・長谷川和樹
秋元康志・泉 祐幸・田中信幸・佐藤建夫
橋本賢二・塩田重利・茅野照雄*

Lipoma of the neck: Report of a case and review of 33 cases in our department

Saburou SUZUKI・Shigeaki SHIOIRI・Kouji KINO・Kazuki HASEGAWA
Yasushi AKIMOTO・Yuko IZUMI・Nobuyuki TANAKA・Tateo SATO
Kenji HASHIMOTO・Shigetoshi SHIODA・Teruo KAYANO*

Abstract: A case of relatively large lipoma of the right neck is reported and thirty-three cases of lipomas treated in our department from 1965 to 1986 are reviewed.

A 64-year-old man was admitted to our department complaining of a right neck swelling. The preoperative diagnosis was lipoma based on clinical findings as well as the image findings of CT scan and echogram. The tumor was excised through a cervical skin incision under general anesthesia. It lied between the platysma and the superficial layer of the cervical fascia. The enucleated yellow and soft specimen was 12×7×6.5 cm in size, and covered with a thin fibrous capsule. The histopathological diagnosis was lipoma. The prognosis has been good for about one year. From our statistical study the distribution by site of 33 lipomas is as follows: eleven cases in the cheek, five in the lower lip, five in the tongue, three in the submandibular region, two in the gingiva, the floor of the mouth, the soft palate, the preauricular portion each other and one in the neck. Males are more affected than females. 76% of the patients are over 40 years of age.

Key words: lipoma, neck, statistical study

緒 言

脂肪腫は、成熟した脂肪組織の増殖から成る良性腫瘍であり、口腔領域では比較的少ないとされている。一

東京医科歯科大学歯学部第1口腔外科学教室
(主任: 塩田重利教授)

* 東京医科歯科大学歯学部口腔病理学教室
(主任: 山本 肇教授)

The First Department of Oral Surgery, Faculty of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University (Chief: Prof. Shigetoshi Shioda)

* Department of Oral Pathology, Faculty of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University (Chief: Prof. Hajime Yamamoto)

受付日: 昭和62年1月26日

方、頸部には全身の脂肪腫の約10%が発生すると言われ好発部位の一つである¹⁾が、われわれ口腔外科においては経験することはまれである。今回、右側頸部に発生した比較的大きな脂肪腫を経験したのでその概要とともに、1965年～1986年までの22年間の当科自験脂肪腫33症例について臨床的検討を加え報告する。

症 例

患 者: 64歳 男性

初 診: 1985年11月■日

主 訴: 右側頸部の腫脹

既往歴: 30年前、急性腎炎

家族歴: 特記事項なし

現病歴: 約12年前、右顎下部の無痛性、柔軟な鶏卵大

写真 1 A 初診時正貌

写真 1 B 初診時側貌

腫瘍に気づき、数年にわたり腫瘍は徐々に初診時と同程度まで増大したが、発育が停止したため放置していた。しばらく前から腫瘍が気になり始め、当科を受診した。

現 症

全身所見：体格は中等度で、栄養は良好であり、全身的に特に異常は認められなかった。

局所所見：顔貌は左右非対称で、右顎下部から頸部にかけ、約 10×7 cm 大の境界ほぼ明瞭で柔軟な無痛性腫瘍が認められ、同部の皮膚色はやや赤味を呈していた(写真 1 A, B)。所属リンパ節所見には特に異常は認められなかった。

口腔内所見：特記事項はなし。

X線検査所見：単純X線写真所見では特記事項はなく、CT において顎下から頸動脈三角部に及ぶ low density mass が存在し、density より脂肪組織が考えられた(写真 2)。

エコー所見：右顎下部よりオトガイ下部にかけて、境界比較的明瞭で辺縁平滑なやや低エコーの腫瘍が認められ、内部エコーは不均一点状の微細なエコーよりなり、一部高エコーの部分が存在していた(写真 3)。

臨床検査所見：LDH 485 mU/ml, トリグリセライド 609 mg/dl を示したが、その他に異常所見は認められなかった。

臨床診断：右頸部脂肪腫の疑い

処置ならびに経過：1986年1月■日全麻下に頸部皺線に添い皮膚切開を加えたところ、広頸筋直下に黄色、柔

写真 2 CT 像

写真 3 エコー像

写真 4 A 術中写真

写真 4 B 術中写真

写真 5 摘出物

写真 6 病理組織像 (1)

軟な腫瘍が認められ、ほぼ頸筋膜浅葉上で顎下腺外側から頸動脈三角内より鈍的に剝離し、一塊として摘出した。なお耳下腺下極部は剝離困難のため、腺組織を一部

写真 7 病理組織像 (2)

切除した。顎下腺とは、剝離が容易であり癒着は認められなかった (写真 4 A, B)。術後経過は良好で、術後1年を経た現在、再発は認められない。

摘出物所見：摘出物は、薄い線維性被膜で被覆されており分葉状を呈し、大きさは $12 \times 7 \times 6.5$ cm であった (写真 5)。

病理組織学的所見：細い結合組織の隔壁のある小葉構造を示す成熟した脂肪組織の増生物で、脂肪芽細胞は認められなかった (写真 6)。一部に耳下腺組織が認められるが、腫瘍とは薄い線維性被膜で一層境されていた (写真 7)。

写真8 透過電顕像

病理組織学的診断：脂肪腫。

透過電顕所見：脂肪細胞は、その大部分が電子密度の低い均一無構造の脂肪滴で満たされ、核は圧排されており細胞辺縁に認められた。細胞内小器官はほとんど見られないが、細胞壁は維持されていた（写真8）。

考 察

脂肪腫は間葉系腫瘍に属し脂肪細胞あるいは脂肪組織に由来する良性腫瘍で、頸部、肩甲部、腋窩、腹壁、大腿部などの皮下脂肪組織にみられ、まれに呼吸器、消化器の粘膜、随意筋の筋膜にもみられるとされている。

表 1 当科の自験例（1965～1986年）

症例	年齢	性別	発生部位	病期期間	大きさ (mm)
1	61	男	下唇粘膜	10年	20×20
2	32	男	左口底	2年	15×15
3	20	女	両側耳介前部	15年	6×6
4	37	男	左頬粘膜	10年	20×20
5	73	男	右下顎舌側歯肉	4か月	5×5×4
6	31	女	右頬部	4か月	70×50
7	62	男	左舌縁	2か月	15×15
8	69	女	右口底	3か月	40×30
9	71	女	右下唇粘膜	1か月	20×10
10	27	女	右頬粘膜	6年	35×35
11	56	男	右舌縁	1か月	6×6
12	41	男	左頬粘膜	5年	20×15×10
13	71	男	左頬粘膜	1.5年	26×9
14	67	女	左下顎頬側歯肉	6か月	15×10
15	36	男	右軟口蓋	6か月	7×7
16	52	女	下唇粘膜	6年	6×6
17	60	女	左頬粘膜	12年	30×40
18	57	男	右頬部	2年	60×40
19	29	女	左耳介前部	1年	18×26
20	45	男	左下唇粘膜	3年	15×15
21	47	男	左顎下部	6か月	38×18×15
22	54	男	左下唇粘膜	4年	15×20
23	58	女	左頬粘膜	1週	15×15
24	49	女	右舌縁	3か月	15×22
25	43	女	右舌背	10年	5×5
26	47	男	左顎下部	1年	35×35
27	39	男	軟口蓋正中	2か月	23×13
28	56	男	右舌縁	2か月	7×5
29	55	男	右頬部	1年	37×50
30	49	男	左頬粘膜	15年	54×30×10
31	44	男	右顎下部	2週	60×40
32	70	男	右頬粘膜	自覚せず	20×17×9
33	64	男	右顎部	12年	120×70×65

表 2 部位別頻度

部 位	男	女	計
頰 部	7	4	11
下 唇	3	2	5
歯 肉	1	1	2
口 底	1	1	2
舌	3	2	5
軟口蓋	2	0	2
顎下部	3	0	3
顎 部	1	0	1
その他	0	2	2

表 3 年齢・性別頻度

年 齢 (歳)	男	女	計
20~29	0	3	3
30~39	4	1	5
40~49	6	2	8
50~59	5	2	7
60~69	3	3	6
70~	3	1	4
計	21	12	33

Anderson²⁾ や Shafer³⁾ は、顎部は好発部位であると、また遠城寺¹⁾ は、脂肪腫1,614例中、顎部には166例見られたとしている。顎部腫瘍のうち脂肪腫の占める割合は、植草⁴⁾ は13年間に284例中23例、藤本⁹⁾ は5年間に13例見られたとしている。

当教室の1965年から1986年の22年間における脂肪腫の一覧を表1に示す。口腔内外を合わせて33症例であり、口腔領域における発生率は、石川⁶⁾ もいうように、かつて考えられていたほどまれなものではないようである。

口腔領域における部位別では、Hatziotis⁷⁾、MacGregor⁸⁾ は、頬粘膜、舌、口底の順に多く認められたと述べており、自験例でも頰部が11例と最も多く、次いで舌、下唇に各5例ずつ認められた。顎部では、顎下部に3例見られるが、中顎部以下の側顎部は、本症例のみであった(表2)。これは口腔外科という特殊性であろう。

年齢については、40歳以上に多いといわれており、当科自験例では20歳から73歳の各年齢にみられるが、40歳代(8例)50歳代(7例)60歳代(6例)の順に多く認められ、平均年齢は50.7歳であった(表3)。

性差については、報告者により一定ではないが石川⁶⁾ は男性にやや多いが著変はないとしており、当科においては、男性に多く認められた(表3)。

病歴期間については一般に長期に及ぶとされ、根本⁹⁾ の、42年間にわたる舌の1例の報告があるが、当科

においては1年以内が18例と約半数を占めるものの、1年以上も15例であり、そのうち5年以上の症例が約1/3を占め、本腫瘍のきわめて緩慢な増殖のうかがわせる。

大きさについては、大きいものでは Smith¹⁰⁾ による11×9×7 cm 大の舌の1例、木下¹¹⁾ による16×5×5 cm 大の側頭部から頰部に及ぶ1例の報告があり、顎部においては、折田¹²⁾ の8×8 cm 大、高橋¹³⁾ の7.5×4.5 cm 大、藤本⁹⁾ の6.5×12.5 cm 大の記載がみられ、これらの報告例と比較すると本症例は比較的大きなものと考えられる。当科自験33症例では、2 cm 以下が18例、4 cm 以下が9例で、4 cm より大きいものは6例でありそのうち本症例を除くと、頰部と顎下部であった。

脂肪腫は無痛性で弾性軟、波動は偽波動を呈し、粘膜直下に存在すれば黄色の外観を呈し診断は比較的容易であるが、存在部位によっては困難である。自験例33症例のうち、術前臨床診断の明らかな23症例では、腫瘍としたものが11例、嚢胞が2例、腫瘍が2例、線維腫が2例、リンパ腫が1例、膿瘍が1例であり、脂肪腫としたものは、4例であった。腫瘍とした術前診断の大部分は脂肪腫を第一に疑ったものと推測される。本症例では、臨床経過、臨床所見、エコーグラムならびにCT所見から脂肪腫と診断したが、特に両画像診断は有用であった。

治療法は全摘出術であり、予後は全摘出すれば再発することはないといわれている。本症例では、腫瘍の一部が耳下腺下極と癒着した状態にあったためこの部分を含めて摘出したが、病理組織学的に薄い線維性被膜を介して耳下腺組織に移行しているとの所見が得られたので、必要な処置であったと考えられる。

結 語

64歳男性の顎部に発生した比較的大きな脂肪腫の1例を経験したので、その概要を報告するとともに、1965年～1986年の22年間の当科自験脂肪腫33例についても検討を加えた。

なお、本論文の要旨は、第135回日本口腔外科学会関東地方会(1986年6月、横浜)において報告した。

引 用 文 献

- 1) 遠城寺宗知, 岩崎 宏, 他: わが国における良性軟部組織腫瘍. 癌の臨床 20: 594-609 1974.
- 2) Anderson, W.A.D.: Pathology I. 6th Ed, Mosby Co, St Louis, 1971, p 573-574.
- 3) Shafer, W.G., Hine, M.K., et al.: A Textbook of Oral Pathology. 4th Ed, Saunders Co, Philadelphia, 1983, p 152-153.
- 4) 植草 実, 米山桂八, 他: 顎部腫瘍の臨床診断.

- 外科診療 13: 1123-1129 1971.
- 5) 藤本吉秀, 安部秀一, 他: その他の頸部腫瘍. 外科診療 13: 1130-1136 1971.
- 6) 石川梧朗監修: 口腔病理学Ⅱ, 改訂版, 永末書店, 京都, 1982, 570-572頁.
- 7) Hatziotis, J. Ch.: Lipoma of the oral cavity. OS OM OP 31: 511-524 1971.
- 8) MacGregor, A.J. and Dyson, D.P.: Oral lipoma. OS OM OP 21: 770-776 1966.
- 9) 根本隆一, 三科正見, 他: 舌に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 32: 2390-2395 1986.
- 10) Smith, F.: Lipoma of the tongue. JAMA 108: 522-523 1937.
- 11) 木下靖朗, 中野稔也, 他: 側頸部より頰部に至る巨大な脂肪腫の1例(抄). 日口外誌 30: 2061 1984.
- 12) Orita, Y., Kawata, M., et al.: A case of lipoma in the deep part of neck. KAWASAKI MED J 10: 207-210 1984.
- 13) 高橋光明, 海野徳二, 他: 術前診断が困難であった頸部脂肪腫の1例(抄). 日耳鼻 82: 425 1979.